

帆船「海王丸」東京～リッチモンドを航海 未来の船員と北太平洋へ



海技教育財団は、一般の参加者を研修生として募り、練習帆船「海王丸」で実習生とともに船内生活や航海当直などを体験する「遠洋体験航海」を行っている。
今年、4月5日から5月1日までの東京～カナダ・リッチモンド間の遠洋航海でも体験航海を実施。参加した2人に、船内での生活や実習生との交流、遠洋航海を通じて感じたことを聞いた。

江村 雄次さん



セイルに残る 手仕事に感動

遠洋体験航海に研修生として参加した江村雄次さん(69)は大阪府の出身。参加を考えたきっかけとなったのは、大阪・関西万博の会期中、大阪港に寄港したチリ海軍の大型帆船「エスメラルダ」だった。江村さんは、万博のスペシャルサポーターを務める帆船「みらい」に乗船し、エスコートシップとして大阪湾口で「エスメラルダ」を出迎える企画に参加。「みらいへ」から並んで進む大型帆船の姿を間近に見、針を押し込む作業をし、「機会があれば帆船で航海をしたい」と思ふようになったという。

その後、2025年10月14日から18日まで、横浜から神戸へ向かう練習帆船「海王丸」の国内体験航海に参加。航海に際して周囲に迷惑をかけるような基本的な訓練や、船

夢の帆船で過ごした1か月

「船上は危険が伴います。応募の時点で、不安な点はしっかり伝えました。江村さんは、会社員時代に帆布やテントなどの膜材に関わる仕事をしていました。その経験もあり、帆船のセイルにも強い関心を持っていた。」

「帆船のセイルが手縫いで作られていることは以前から聞いていた。今更には、甲板部員による縫い上げる作業が残っているのは本当に珍しく、その現場を実際に見たかった。」

念願かない、体験航海中では、甲板部員による縫い上げる作業が残っているのは本当に珍しく、その現場を実際に見たかった。」

出港後は、北太平洋の波高7メートル、船体傾斜角度33度という激しい揺れに見舞われたほか、船酔いで食事を取れない日もあった。それでも次

上杉 雄二さん



念願の航海 非日常を満喫

山口県出身の上杉雄二さん(67)は「男のロマン」を求めて遠洋体験航海に参加して参加した。

「ヨット乗りにとって、『海王丸』への乗船は憧れであり、夢。生きていくうちに一度は体験してみたいことでした。」

現在は福岡県に在住し、同県内の企業でクルーザーの整備に携わっているという上杉さん。主に船底作業を担当し、日

「陸での日常生活とは異なり、航海は非常に面白く、楽しいものでした。初めて一緒に過ごす7人の研修生とも、和気あいあいと過ごすことができました。」

2段ベッドのボンクも



船に降り立ったツバメ



船上から見たカナダの港町

時には、実習生からリーダーの見方や操船について説明を受けた。進路について尋ねると、それぞれが将来の仕事について明確な目標を持っていることも分かった。

実習生からは「なぜお金を払って、苦勞の多い帆船に乗るのか」と不思議そうに尋ねられることもあったという。

「船乗りは自然を相手に、決められた時間の中で職務を全うしていく。研修生にとっては憧れの船であり、学びの場でもある。立場は違っても、一緒に引いたロープの重さや、忘れられませんが」

船員を目指す若者たちの考え方に触れることができた。

「自分の子供より若い人たちが船乗りを目指して勉学に励んでいる姿に、頼もしさを感じた。今の若者も捨てたものじゃないなと感じました。」

また、船内の雰囲気の良い印象が残った。教官や乗組員、周囲のフォロワーがしっかりといて、長い航海の中でも大らかな不安を感じることがなかった。

「海は男の世界」という印象を持っていた上杉さんにとって、女性の実習生や乗組員が活躍する姿も印象的だった。教官上杉さんはこう呼びかけている。

「体験航海は、いい意味での非日常体験。『海王丸』は、乗るより見る船、とも言われるが、私は実際に乗ってこそ魅力が分かる船だと思う。ぜひ乗ってみてほしい」

海技教育財団 遠洋体験航海 研修生インタビュー